

二〇二三年四月二十九日

昭和の日笑みし遺影の母若し  
須磨沖に浮かぶ帆船風光る  
尺取りや五体投地の枝の先  
風呂敷を解けば筍まるび出づ  
しゃぼん玉影もろともに壊れけり  
間遠なる蛙の声は子守唄  
雨けぶる東京タワー昭和の日

二〇二三年四月二十八日

他所行きの母のよこがほ春日傘  
ガラス窓より緑さす理髪店  
磨り硝子染めてさ揺らく庭若葉  
人伝てに廃業知りぬ花の宿  
留学生筍飯に舌つづみ  
春光に水面眩しき沈下橋  
目印の櫂の大樹芽吹くなり  
桜蕊だらけの礎や踏み惑ふ

二〇二三年四月二十七日

泣きどころなのに笑へる村芝居  
カーテンの揺れに戯れつく仔猫かな  
茶畑や萌黄が陣を広げをり  
郭公や空の奥行き思ひけり  
巢立鳥羽色のまだ整はず  
北窓を開く間遠に海鳴りす  
歳時記の糸とじ直す日永かな  
能登の塩八十八夜の潮を汲む

二〇二三年四月二十六日

衣擦れは吐息に似たり春障子  
春塵や止まる遺品の置時計

なつき  
みきえ  
みきお  
ひのと  
はく子  
素秀  
むべ

ひのと  
宏虎  
せいじ  
ひのと  
むべ  
素秀  
澄子  
こすもす

なつき  
宏虎  
かえる  
むべ  
豊実  
澄子  
やよい  
凡士

ひのと  
なつき

節くれ手春耕の鍬振り上げて  
雪柳風にワルツををどりけり  
梅日和活断層の真上てふ  
あれそれと会話尽きざる日永かな  
一頻り山鳩啼いて谷若葉

二〇二三年四月二十五日

また一尾家族の増えし鯉のぼり  
若人の尖る靴先入社式  
風涼し北斗星なす庭の石  
傾きし鉢を上げれば大百足  
石庭の島嶼を渡る風涼し  
夕立に土の匂ひの湧き上がる  
追ひついて二つとなりし春日傘

二〇二三年四月二十四日

音も無く降る雨窓に春惜しむ  
洗車場の水に生まるる春の虹  
深春や二度寝の夢はきれぎれに  
ひと筆のこけしの眉や余花の雨  
カーネーション母の墓前に手向けけり  
豌豆の莢に数へる豆の数  
背にありし子が藤房に手を伸ばす

二〇二三年四月二十三日

春光や苔押し分けて立つ実生  
雨ごとに玉ねぎ球を膨らます  
通天橋湖のごとくに若楓  
くずきりの暖簾の奥の長通路

千鶴  
みきえ  
澄子  
もとこ  
凡士

もとこ  
みきお  
せいじ  
明日香  
みきお  
あひる

満天  
かえる  
もとこ  
凡士  
きよえ  
あひる  
素秀

豊実  
千鶴  
せいじ  
あひる

毎日句会みのる選・二〇二三年五月一日